

舞台『SUZUKA博士の異常な』研究結果

『SUZUKA博士の異常な』研究報告と今後のLABOについて

【研究結果】

公演が終わってからも一ヶ月、ずっと『SUZUKA博士の異常な』を考えていました。自分が何かを作ってここまでひきづった作品は初めてのようになります。この作品の夢を2週間ほど毎晩見て、この作品はなんだったんだ、とずっと悶々と考えていました。考えたことを文字にするととんでもない長文になるので書けませんが、結論として「何を言われようと作り続ける根性が自分にはあるのか」という疑問に辿り着きました。作品は今まで同様、役者陣、スタッフ陣の素晴らしい働き、心遣いによって成り立ち、環境や身の回りに恵まれていたと、しみじみ、今も思います。それ故ひきづりました。

今回、自分が日々感じている「わかること、意味があること、価値があることが、五月蠅くて仕方がない」という感覚を作り方(特に脚本)に反映したいという、ある意味エゴを通した作品だったと思います。わかることから離れたい、日々の窮屈な思いを開放して、わからないまま進みたい、と決めて始めたことにより、作っていく中で足元がないような大変な恐怖を覚え、見る側にも混乱を招きました。自分としてはエゴとはいえ作品の着地に「おそらく嘘はない」と納得しているのですが、「わからない」ものを作るにはあまりにも時間(つまり冷静さ)が足りなすぎ、情けないのですが、明らかなキャパオーバーを体験しました。

そして自分の感覚をありのまま通すということは、お金を払って観に来たお客様にとってどういうことだったのかという問題、後悔も生まれました。

自分の心を振り返ってみると、価値や意味から消えてしまいたい、と日々思う割に、無意識のどこかで「私には何らかの価値がある」という自惚れがあったような気がします。自惚れは精査(俯瞰・冷静さ)を欠く要因です。どこで何を勘違いしてしまったのだろうと非常に恥ずかしく思います。

「めちゃくちゃよかった」と言われれば一瞬心が浮上し、「わかんない」「つまんない」と苦い顔をされれば長く傷つく自分にも腹が立ち続けた一ヶ月でした。

結局はなんだかんだ囚われていた自分が一番「五月蠅い」のです。

前述した、長い人生で「何を言われようと作り続ける根性」があるのか、どうなのか。

人の評価で一喜一憂している現状ではいつか、作っていても作っていないに等しい事態になるか、
疲れて辞めてしまうと思います。

人ではなく自分で自分を正しく評価しなくてはいけない、と戒められました。

自分で自分を”正しく”評価する・・・

大切な友人の言葉を借りるなら「謙遜ではなく自分はただの肉袋でしかないと本気で思っている謙虚さ」
がなくてはきっと叶わないと思います。でなければ視座は簡単にブレるからです。

話は脱線しますが、アキ・カウリスマキ監督の映画『枯れ葉』を先日観て、

日々を生きることでギリギリの女がスーパーで安い食器を買って

日々を生きることがギリギリの男を待つシーンがありました。

二人はそれぞれの”なけなし”を持ち寄って彼女の小さな部屋の窓際で食事をしました。

やがて、紛争の情報をラジオは流しました。

・・・うまく言えませんが貴方もこの世界の一人なんだよ、とやさしく諭された気がしました。

演劇、芸能の世界にいと、油断すると、その業界の繋がりや言葉に染まってしまう。

その中では、どうしようもない。受け手はそうじゃないということを肝に銘じなければいけません。

長々と綴ってしまいましたが、シンプルに書きますと

当たり前ですが、やっぱり人に喜んでもらいたい・・・分かち合いたいです・・・。

いまだに研究結果と呼べない複雑な感情ですが、見えなかった自惚れに気づけたこと、

世に開く(人に見せる)とは何なのかを考えるきっかけになったこと

(個人的には)今後を考えると、よかったんだろうな、と思います。

■余談

観たもの、それぞれの心に湧いたことが全て、というのが形のない表現なんだろうに

終わったあとレポートで言語化しなくてはいけないという任務を

自分に課した2019年の自分をやっつけた。お気持ちなんて言葉にできない・・・。

でもやりたくないことを自分で自分に強制する矛盾した歪さも少し信じている。

先日、友人と話していて思うことがあった。

土俵の話。土俵に上がらない表現が増えているのではないかという話。

「評価」を避ける、評価できない表現。つまり、作り手が傷つくことを避ける表現。

自分は、自分の番じゃないのに全裸で震えながら土俵に上がってくるような人になりたい。

でもそれ、絶対怪我するよね、何なら不戦敗・・・。表現って怖い。理想ばかりが先立つ。

【今後の研究】

書いた戯曲(試作)を今2つストックしています。1つはメインキャストの方にも声をかけ
時期未定ではあるけれどやるときにぜひお願いします、とお声がけも済んでいます。
ただ、残念なことにその戯曲は2つとも大きな空間でないと成り立たない戯曲で、
現状、お金も、人気も、コネクションも、興業として成り立たせる能力も何もかもないので、
難しく、今年なにしよう、と空っぽです。

じゃあ今まで通り公演をととも考えましたが、今の自分に人を雇うエネルギーが
あるかと言われるとどうなのか。制作、宣伝、仕切り、その上での創作、
そうなる则自分の生活(お金)との睨めっこ。それで仕事を沢山すると
作る時間が減り、きっとまたキャパオーバーを招く。どうしたものかな、という現状です。
時間、体力、精神力が充分でないと冷静ではられない。
本当に何かを作ることは物理的にも大変なんだな、と身に染みます。

ですから今は、元気になったら人に沢山会って、色んなものを見て、
自分に何ができるかを考えてみたいと思います。
原点回帰、今は一人でできる表現、しかないのかな、という気もしています。
そして、次にしっかり作るために、もう少し人にやさしくなりたいです、
人にあたたかい関心を寄せられる人になりたいです。

以上を報告とさせていただきます。

お付き合いありがとうございました。

今後もZURULABOをよろしく願いいたします。

ZURULABO 所長・小野寺ずる

